

再葬土器棺の特殊な埋納形態に関する - 考察

青森短期大学助教授 葛西 勲

1. はじめに

縄文人が死者の再生希求を意識して人骨を土器に収納し再埋葬する行為は、東北日本の中期から後期にかけて認められる。特に青森県を中心とする東北北部では後期初頭から前葉にかけての土器棺墓にそうした行為が顕著に認められる。縄文時代に広く行われた土壙に遺体を収めただけの土葬に比較すればかなりの手の込んだ埋葬の仕方である。その行為は亡くなった同胞に対する再生を希求する縄文人の心情として汲み取ることができる。土器棺は通常、単式土器に遺体を収め埋納したものが多く発見されているが、中には特殊な形態の土器棺も検出されている。薬師前遺跡や小牧野遺跡から出土した土器棺にそうした行為を見て取ることができる。二遺跡から出土した土器棺の一部は一人の遺体を再埋葬するのに2個や3個の別個の土器を使用しているのであって、それは遺体を2個3個の土器に分散する行為とは明らかに異なっていて、2~3個の土器を組み合わせて1個の土器棺をつくりあげたものである。単式土器棺に対して仮に複式土器棺、複式土器棺墓としておくが、有り合わせの土器を無意識に組み合わせて埋納したとは考えられず、そうしなければならない縄文人の作為として認識したい。まず二遺跡で確認された再葬土器棺墓の実態を把握し、内部の人骨の配列を分析し、最後に私見を述べてみたい。

2. 薬師前遺跡の土器棺墓

薬師前遺跡は三戸郡倉石村にあり、1973年5月にトレントナーで掘削中に土器棺の一部が当たり、緊急発掘調査となった。土器棺は一つの直径120cmの円形土壙内に3個鼎状に配列されていて(写真1)、3個ともそれぞれ別個体の人骨を収めていた。人骨の保存状態はこれまでになく良好で、特に第1号棺と第3号棺は人骨の各部位の納入状況が明らかにされている。各土器棺の構成は次のようにになっている。

第1号棺は西側に配置されていた。まず大型壺形土器(甕棺土器)の胴部下半を半截したものに人骨を収め、それを覆って高さ61cm、口径50cmの深鉢形土器をスッポリと被せた構造になっている。人骨を収めた土器が(1a)で、覆っていた深鉢形土器が(1b)である。第2号棺は北側に正立の状態で配置されていた。他の2個とは異なり、3重構造になっている。まず胴部上半から口縁部にかけてが欠失している高さ40cm、胴部最大径43cmの人骨を収めた甕棺土器(2a)を正立させ、その上部を覆って別の甕棺土器(2b)の胴部上半を半截したものを載せ、その口縁部にやや小型の壺形土器の胴部下半(2c)を載せて蓋としたものである。一見一個体の甕棺土器に蓋を被せたように見えるが、胴部上半の甕棺土器が実は第1号棺の胴部下半と接合されるもので、複雑さを醸し出している。両者は焼成後に粘土の繋ぎ目から離されたもので、その技術は驚嘆に値する。第3号棺は高さ57cm、口径38cmの円筒形に近い深鉢形土器(3)が伏せられていたもので、他の2個のように内部に人骨を収めた甕棺土器は存在しないが、人骨はコンパクトに集積されていた。人骨は土器の内側の壁に接しておらず、人骨は元々有機質の入れ物か、帯状の幅の広いもので束ねられたうえに深鉢土器を被せたのではないかと推測する。一見第3号棺は単式土器棺であるが、土器以外の容器を使用して人骨を集積した可能性は大きく、推測ではあるが複式土器棺の一種でなかつたろうかと思われる。

3. 小牧野遺跡の土器棺墓

小牧野遺跡は青森市の南部郊外にあり、平成元年度の学術調査で筆者らによって発見された。環状列石の調査で土器埋設構造2基が別々に検出されたもので、いずれも列石の内帯と外帯の間から出土しているので環状列石に伴った土器棺と考えられる。

第1号棺は東南側から検出されたが、3個の土器で構成された複式土器棺である。人骨は残存していなかったが、無機磷酸濃度分析から人骨が納入されていたことが確認されている。まず高さ57cmの甕棺土器(4a)を土壙に設置して人骨を収め、その人骨に被せるようにやや小型の壺形の胴部上半を半截したもの(4b)を置き、浅鉢形(4c)をもって蓋をしたものである。なお甕棺内部の壺形土器設置にあたっては甕棺土器の胴部上半を一部壊して納入していることが判明している。第2号棺は西側で検出され、2個の土器で構成されている。まず底部を欠いた高さ35cm、口径30cmの深鉢形土器を直径35cmほどの土壙に立て、底面に他の土器の胴部の破片を二重に敷き詰めたもので、それから人骨を収めたものと思われる。この遺跡からはもう1個の土器棺(甕棺)が発見されている。素人が興味本位に掘り上げたものであるため、その埋納状態については不明であるが、土器は大型壺2個、浅鉢1個の3個体分ある。あるいは第1号棺のような組み合わせになっていた複式土器棺であったかも知れない。

4. 類例と比較

さて薬師前遺跡のように1個の土壙に3個の土器棺が収納されていた例は他にもある。浪岡町松山遺跡、六ヶ所村鷹架遺跡、五戸町ウルク長根遺跡が上げられ、さらに土壙ではないが石室状遺構に3個納められていたのが青森市山野峠遺跡である。森本岩太郎によると家族墓の可能性を指摘している(森本1988)。ただ2個以上の土器を用いて一個の土器棺を構成する複合土器棺例はあまり多くなく確かな資料は少ない。薬師前第1号棺のように2個の土器を組み合わせたのは、同じ村の上ノ平遺跡、古い記録ではあるが、弘前市八幡館が上げられる。また胴部から半截した土器棺(甕棺土器)はむつ市一里小屋遺跡、黒石市六郷、岩手県一戸町小鳥谷遺跡で出土しているが、はたして深鉢形土器を被っていたかは不明である。小牧野遺跡の第1号棺、薬師前遺跡の第2号棺のように3個の土器を組み合わせた複式土器棺はこれまでのところ他に類例がない。図1に模式図を示したが、両者を比較すると、非常によく似ている。2段目の土器が薬師前遺跡は外側で本体を覆っているのに対して、小牧野遺跡は本体の内部に納められていたもので、直接人骨に被せていた可能性がある。3段目の土器は両遺跡とも蓋と見なしてよいが、利用している土器が薬師前遺跡は壺、小牧野遺跡は浅鉢である。時期的には小牧野遺跡の方が後出するようである。

5. 考察

本稿では複式土器棺のうちでも薬師前遺跡第2号棺や小牧野遺跡第1号棺のように3個の土器で構成された複式土器棺について考察し、私見を述べたい。

一体何故このような複雑な土器棺を構成したのであろうか。それは棺内の人骨の配列と係わり合いがありそうである。再葬土器棺墓はこれまで40箇所以上で発見されているが、人骨が残存した例は極めて少ない。幸い残存したとしても各部位が識別できるほどの保存状態が良好な例はこれまた少ない。人骨が遺残していた遺跡は次の10カ所である。

1. むつ市酪農12号

6. 青森市久栗坂山野峠

- | | |
|-----------------|------------------|
| 2 . 上北郡六ヶ所村表館 | 7 . 青森市駒込月見野 |
| 3 . 上北郡六ヶ所村鷹架 | 8 . 南津軽郡浪岡町天狗岱 |
| 4 . 三戸郡倉石村薬師前 | 9 . 南津軽郡浪岡町松山 |
| 5 . 三戸郡倉石村又重上ノ平 | 10 . 南津軽郡平賀町堀合 号 |

これらのうち森本岩太郎によって人骨が調査されたのが表館、薬師前、上ノ平、堀合 号、月見野である。特に薬師前遺跡第3号棺の人骨の残存状態については、「中略、その中に保存状態良好の壮年期女性骨1個体分があった。覆土の上には右の上腕骨、左右の大腿遠位端、左右の脛骨近位端などが北寄りに林立するように突き出している。上方から覆土を取り除いていくと、南半部にはイノシシの牙を半截して短冊形にし、その両端に1~2個の小穴をあけた垂飾品12個が副葬されていた。これらの垂飾品を囲むように肋骨などがある。椎骨はおおむね自然の順番に重ね合わされている。棺の南端付近にまず第3頸椎~第2胸椎が頭側を東北に向けて1列に並び、これに続く第3~6胸椎が急に北方へ折れ曲がったように方向を変えている。第3~4頸椎に接するように左の肩甲骨と鎖骨があり、その下に胸骨がある。左の肩甲骨の上角は脊柱列の頭側に一致する。棺内の南東部には胸椎より下方に手足の骨が左右別に比較的まとまって存在する。このレベルには腰椎2個と右の腸骨が東寄りに、また右の尺骨近位端が中央付近にある。大腿骨と脛骨については左が西、右が東を占めるので、北向きの人が両膝を屈曲して蹲踞したときの姿である。上肢骨は棺内の西側を占め、北西側に右、南西側に左の上腕骨が位置する。両側上肢とも肘を強屈して棺底に置き、肩と手を上方に向かって姿勢であるが、右の尺骨だけは近位端と遠位端が逆である。左の橈骨と尺骨の遠位端寄りに、ベンケイ貝で作られた輪状の貝輪7個を積み重ねて装着している。」そして青森県内出土の再葬土器棺から得られた人骨の総合的な所見によると、「土器棺が正立と倒立とにかくわらず、人骨は蹲踞姿勢をとらされて収められていた「棺内における人骨の蹲踞位は母体内における胎児の姿勢に似せて死者の安楽と再生を希求するものであり、頭蓋を低位に置いたのは出産時の頭位分娩を意識した行為である」と述べている(森本1988)。その行為が現在沖縄県下や東南アジアで行われている洗骨葬に似ているとも指摘している。可児弘明によれば、香港の船上生活者の洗骨後の納骨は蹲踞位の状態であるという。その方法は、まず骨盤を棺内壁にもたせかけ、その上に腰椎を立て、腰椎の左右に胸椎と頸椎を置く。これらの上に肩甲骨・肋骨・鎖骨・胸骨を積み重ね上げる。その上に頭蓋を置く。その左右に四肢骨を配置するが、その順序は内側から脛骨、大腿骨、腓骨、尺骨、橈骨、上腕骨の順である。最後に手足の骨が一括して入れられ、副葬品は皆無である。と言う(可児1970)。この人骨の配置と薬師前遺跡の第3号棺の配列を比較した森本によれば、頭蓋の高さを除けばおおむね一致するとのことで、驚くばかりである、と述べている。

土器棺内に蹲踞位をとらせるのに縄文人はどうやって人骨を固定し、間違いなくそれらを配列することができたのであろうか。薬師前第3号棺の場合は何か有機質の入物に人骨を配列して深鉢を被せたもので、第1号棺は入物が甕棺土器の下半部であって深鉢を被せたものであった。要するに人骨を確実に蹲踞位に配列するためには配列しやすいような容器が必要であって、それは口の狭い深みのある壺形の容器では向きであったに違いない。薬師前遺跡第2号棺の人骨の配列はおおむね第3号棺と同じであったと言う。第1号棺の容器は甕棺土器の半截したものであって、人骨を蹲踞位にしやすいように半截したものと思われる。問題の第2号棺であるが、人骨を収めていたのは第1号棺と同様に甕棺土器を半截したものであった。本来深鉢を被せれば他の2個の土器棺と同形態になるわけであるが、第1号棺の半截した上半部を被せて1個の土器棺に仕立てたのである。正立であるために第3の土器を蓋にした

のであった。小牧野遺跡第1号棺の場合は、土壙に底部を抜いた大型壺形土器を設置し、次にこの土器の東側の口縁部から胴部にかけてV字状に壊して破片を取り去り、この割れ口から人骨を蹲踞位に配置してその割れ目を補う形で第2の壺形土器の半截した上半部をおそらく立てられた大腿骨に被せるように設置したもので、最後に第3の土器浅鉢をもって蓋をしたのである。内部の第2の土器が割れ口の部分にあつたこととしかもそれが浮いたような状態にあつたので大腿骨がこの土器を支えていたと推考した。薬師前遺跡では人骨を蹲踞位にしやすいように土器を半截したものを使用し、欠損部を補うために別の半截した上半部を被せて1個の土器棺を作り上げた。一方小牧野遺跡の場合は人骨を蹲踞位にしやすいように土器を壊し、その割れ口を補うために別の半截した土器の上半部分を土器の内部に設置したと言う結論に達した。

人骨に深鉢形土器を被せる形態は縄文中期・後期を通して東北地方北部では太平洋側に主として見られてきた形態で、むつ湾および日本海側では壺形のいわゆる甕棺土器を正立させる形態が主体的であった。薬師前遺跡では1つの土壙で両形態が認められたが、主体はこの地方で伝統的な深鉢形土器を被せる形態であった。同村の上ノ平遺跡の土器棺も伝統的な形態であった。人骨を蹲踞位にして土器に収める行為は再生を希求して母胎に返す行為であり、土器は母胎であった。蹲踞位にしやすいよう土器を半截したり、その一部を壊しても、土器は母胎であるために元に戻す必要があった。こうした縄文人の心情が複式土器棺となって成立したのである。

6.まとめ

東北地方北部で縄文後期に盛行した再葬土器棺墓に、3個の土器を組み合わせて人骨を収めた複式土器棺があり、青森県の薬師前遺跡、小牧野遺跡で確認された。この特殊な土器棺は、人骨を確実に蹲距位にするために採られた行為から生じたものであり、そのために土器を半截にしたり、一部を壊しているが、人骨を蹲踞位にする行為は死者に対する再生希求を意味し、土器を母胎に想定していることから別な土器を充足して復元したもので、死者の再生を願った縄文人の心情によって生じた行為であった。

小論を草するにあたり、村越潔・市川金丸両氏からいろいろと御教示をいただいた。また、高橋潤・児玉大成両君には実測図作成等で御協力をいただいた。以上記して感謝の意を表したい。

(註)土器棺と甕棺土器の区別であるが、青森県下で出土した縄文後期の人骨を収めた土器を集積した結果、江坂輝弥が指摘した「改葬甕棺土器」の外にも人骨を収めたものがあることが判明した。そこで江坂が指摘した土器を甕棺土器として扱い、それも含めて土器に人骨を収めたものを石棺や木棺に対して土器棺と称することにした。したがって本文中に甕棺土器としてあるのは江坂が指摘した人骨収納特製の土器を指す。

(註)従来改葬甕棺と呼称されていたものを再葬土器棺としたのは、改葬には広い意味があって、例えば、住居を造ろうとして掘り下げたらたまたまそこが墓地であって出土した骨を別な場所へ改葬する、と言う意味も含まれる。そこで縄文人が死者の再生を希求して再葬する意識的なことを指す。土器棺としたのは上記の理由からである。

薬師前遺跡の土器棺

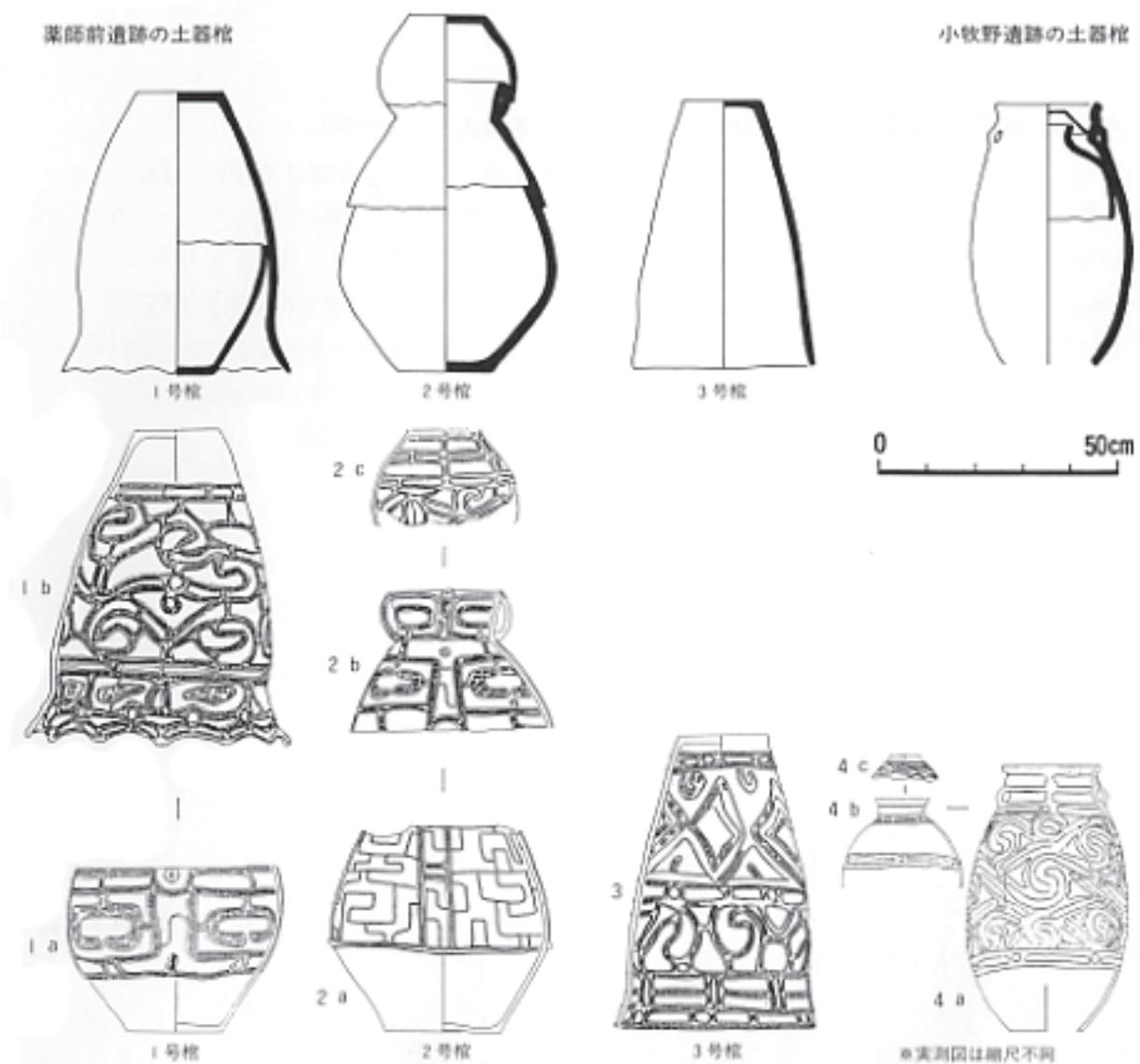


図1 複式土器棺の組み合せ例

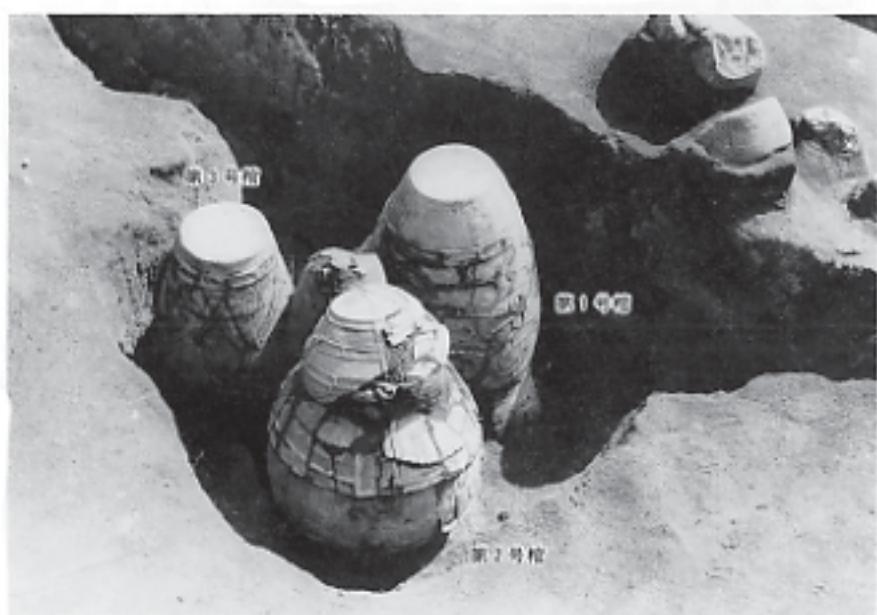


写真1 薬師前遺跡の土器棺墓 (市川 1978)

引用文献

- 1989 葛西 勲・高橋 潤『青森市小牧野遺跡発掘調査報告』
- 1978 市川 金丸「三戸郡倉石村出土の縄文後期甕棺土器について」青森県考古学会会報
- 1988 森本岩太郎「本州北端における縄文時代後期改葬甕棺内人骨について」
- 1970 可児 弘明『香港の水上居民』岩波新書 岩波書店
- 1968 江坂 輝弥「縄文土器文化後期における改葬甕棺墓の研究」『北奥古代文化』1号
- 1983 葛西 勲「第5節 縄文時代中期、後期、晚期（葬制の変遷）」『青森県の考古学』
- 1991 葛西 勲「東北地方北部に於ける土器棺再葬墓の初期形態の研究」『燃糸文』18号
- 葛西 勲「北日本の縄文時代における再葬土器棺について」（印刷中）